

み誤りなど、多様な要素が絡みついたその一瞬の油断・判断の誤りにより、財政破綻への道を進んでしまった。

今の少子高齢・人口減少社会、税収等の減収という情勢の中で、同じ轍を踏まないために、議会

はより一層切磋琢磨し、行政情報や社会情勢、住民らの情報などに対するアンテナを張り、慎重・的確な議会運営を行っていかねければならないと、夕張市の例を目の前に見つつ、心に刻みました。

(記 井上 栄一)

厳寒の小さな町が若者を引き付ける魅力

下川町は、かつては人口3500人となつた町ですが、ここ2〜3年少しずつ若者の転入が増えています。町面積の88%を占める森林を、60年サイクルの植林と伐採で保ち続けています。

この循環型森林経営を基盤に、危機意識をバネにまちづくりに取り組んでおり、平成23年には、国の地方創生事業の一環の「環境未来都市」に選定されています。

森林の「ガスケード利用」が好循環を生む

森林の恵を余すところ



一の橋バイオビレッジの現地も視察

なく利用する「ガスケード利用」で、木を、木材・集成材・オガコやチップ・炭・木酢液、さらには枝葉も蒸留して精油にするなど、全て使い尽くしています。

破砕された残材チップは、木質バイオマスエネルギー燃料として福祉施設、学校、病院、役場周辺、温泉など町内11基のボイラーに使っています。全公共施設の熱需要の約60%、年間約1900万円を削減、浮いたお金をボイラーの更新と子育て支援に使っています。それが若い世代を引きつけています。

町の一面に「バイオビレッジ構想」を掲げ、木質バイオマス燃料で暖房完備の町営住宅を作っています。全住宅は廊下でつながり、公共エリア・郵便局・バス待合室まで、冬でも外に出ることなく行けます。

外観も赤が効いたモダンなデザインで、常に入居希望者が空き待ち状態。「地域おこし協力隊」も受け入れ、任期満了14名のうち9名が定住しています。

地に足がついたまちづくりで未来を見据える

バイオマスは将来的には発電にも生かし、エネルギーの自給自足も目指しています。元来の強みを生かして新しい構想に取り組み、そこに若い人

も引き込んでおり、地に足がついたやり方で未来を見据える下川町には、学ぶべきことが多くありました。

(記 平野 由里子)

独自の施策で活気にあふれる東川町

東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、町の面積は松田町の6・5倍の広さがあります。明治28年に開拓がはじまり、水田農業を基幹産業として

高等学校写真選手権大会を1994年に立ち上げました。

「お米と工芸、観光の町」をキャッチフレーズに発展してきました。

幼児、小学生、中学生が参加する「写真少年団」では、写真を通じて感性を磨き、写真を楽しむ活動は地域の活性化にもつながるものと感じました。

ひがしかわ株主制度

北海道の最高峰「旭岳」を有し雄大な自然環境に恵まれている町で、平成29年3月末現在の人口は、8126人です。

町が掲げる事業の中から、投資したい事業を選び、ふるさと納税など東川町に対し寄附された方々に、株主という形で町づくりに参加できる仕組みです。

豊かな文化田園都市づくりを目指して、1985年「写真の町宣言」を行い、10年目に写真の魅力と感動を伝える大会として、写真甲子園「全国

株主には、「ひがしかわ株主証」が発行され、町の公共施設が町民価格で利用でき、また株数に



概要説明をする高橋東川町議長

上水道が無い町

上水道が無い町として、大雪山からの豊富な伏流水を生活用水に利用し、飲料水として適しているか水質検査書等の提出が義務付けられている。

その他「君の椅子」制度は、東川町で生まれてきた子ども達に手作り椅子を贈り、また中学校入学時も名前の入った新しい椅子が贈られ、卒業時に3年間使用した椅子がプレゼントされます。

こうした独自の施策が人口増に結びついていると感じました。

(記 飯田 一)